



水都大阪に思う

本年はDAN計画研究所がこの大阪の地に法人設立して35周年となる。設立当初はシンクタンクというよりアイディアやデザイン、編集等、何でも依頼があればやるというスタイルであったが、関西新空港や商店街活性化等に取組む中で、まちづくりのシンクタンクという今のスタイルが出来てきた。

中でも上町台地とリバーフロントは、受注業務からではなく、自主研究からスタートし、今も関わる、いわば事務所のライフワークのようになっている。この夏には大川、中之島を中心に「水都大阪2009」というイベントが開催され、一つの節目となる。

DANがこの領域に関わったのは平成元年である。故紙野桂人先生の指導の下、大阪府、大阪市、民間企業、研究者等が約40名集まり、6年間じっくり勉強した。途中からは正式に大阪府市から受託し、1995年に「大阪リバーフロント整備のグランドデザイン」として公式発表された。

その後、道頓堀リバーウォーク、八軒家浜、京阪中之島線開通と小ド整備も進み、ソフト面では「大阪の汚い川を誰が金を払ってまで観るものか」と周辺に冷やかに言われた。なにわ探検クルーズの大成功（落語家のシナリオをDANがプロデュース）、水上タクシーの協議会設立（DANが事務局）、数え上げればキリがない程関わってきた。

「水都再生構想」や「花と緑、光と水のまちづくり構想」策定にも裏方として参画した。実はこの構想作りのスタート直前、予備調査をやったが、その時、リバーフロント研究会の流れをおさらいしつつ、最新状況を押えようと2002年3月に紙野先生にお越し頂きワーキングを開催した。この年の7月に永眠されたが、最後の会議で水都再生が本格的に動き出すスタートとなった事に何か不思議な因縁を感じずにはおれない。

もう一つ、大阪商工会議所の依頼で「川から見た風景」を良くしようと2006年に構想を取りまとめた。絵に描いたモチではいけない。一つからは具体化に結びつけようと、当時誰も相手にしなかった東横堀川の再生に取組んだ。DANも地元と意識から沿川企業や住民に飛び込み訪問し仲間を増やした。今は、大橋会長の下、約130人のメンバーが公園掃除、橋洗い、イベント、「コミュニティリズム」ソーシャルカレッジ、川の駅など信じられない程盛り上がり続けている。

世界は今、大変な景気後退の局面にある。大阪も否応なく大波に飲み込まれていくだろう。しかし元来大阪は、町衆や庶民の自立心旺盛なDNAを持った都市だ。経済的な生活は厳しくても、上町台地や船場の歴史を楽しみ、水都大阪の魅力を高めていく流れを止めることはできない。開発は遅れても、そうした底力こそが大阪本来のあり方ではないかと思う。本年もどうぞよろしくご指導ご鞭撻下さいますようお願い申し上げます。

平成二十一年 元旦

DAN計画研究所 代表取締役社長

吉野国夫